

# マクデブルクのメヒティルト著 『神性の流れる光』の社会的背景 5 — 教皇の首位権 (2) —

狩野智洋

## 1. 序

コンスタンティヌス 1 世 (Constantinus I, Magnus, 272 以降 - 337, 在位 306 - 337) の登場は 4 世紀のキリスト教 (会) に大きな変化をもたらした。彼はキリスト教に対する迫害を終わらせたという極めて大きな貢献をした反面、帝国の平和政策にキリスト教会を利用するために教会に対する介入も行った。

皇帝の介入による教会への影響が如実に表れたのが、神 (父) とキリスト (子) の関係に関する論争<sup>1</sup> が発展して、アレイオス派と反アレイオス派の対立という形で語られるようになった東方教会内の対立である。本稿では、この論争を概観することによって、後々、西方教会のローマ司教にも多大な影響を及ぼすことになる、皇帝の介入による教会への影響がどのようなものであったのかを明らかにしたいと思う。

---

1 アレイオス派と反アレイオス派の対立という形で語られるようになった神とキリストの関係に関する論争に就いては、主として以下の文献に拠った。

Ritter, Adolf Martin: Arianismus. In: Theologische Realenzyklopädie. Studienausgabe. (以下 TRE と略記) Berlin, New York, 1993-2006. 3, S. 692 - 719. Brennecke, Hans Christof: Arius/Arianismus. In: Religion in Geschichte und Gegenwart. Handbuch für Theologie und Religionswissenschaft. Vierte, völlig neu bearbeitete Auflage. Ungekürzte Studienausgabe. (以下 RGG と略記) Tübingen, 2008. 1, Sp. 738 - 743. Simonetti, Manlio / Manselli, Raoul: Arius, Arianismus, Arianer. (Simonetti: Arius, Arianismus./Manselli: Arianer.) In: Lexikon des Mittelalters. Studienausgabe. (以下 LM と略記) Stuttgart, Weimar, 1999. 1, Sp. 949 - 951.

## 2. アレイオス以前の神とキリストの関係に関する論争

2世紀に入ってキリスト教の重点がパレスティナからギリシアの領域に移ると、キリストの宣教をヘレニズムの表象世界に翻訳する必要性から、聖書の具体的な語りが存在に関する形而上学的概念性によって押しやられた。<sup>2</sup> 3世紀にはキリストの普遍的な意味を明らかにすると同時に一神論を堅持するため、キリスト教神学がギリシア哲学のロゴス（λόγος 言葉、理性、宇宙の法則等）論を導入して、神の子キリストと父なる神との関係、即ち、存在に関する形而上学的独立性（ύποστασις）という意味での違いを理解しようとした。<sup>3</sup> その説は、ロゴス（λόγος 人となった（受肉した）神の言葉＝キリスト）の独自の存在（Eigenexistenz）とその神性を保証していたが、ロゴスを神より下位に置いていた。<sup>4</sup>

このロゴス・キリスト論に対立する説として、大別して2説<sup>5</sup>があった。これらは全く立場が異なるにもかかわらず、教義史の叙述に於いては、神の単独支配を意味するモナルキア主義（Monarchianismus）と呼び習わされている。<sup>6</sup>

その1つは養子論（Adoptianismus）又は力動論（Dynamismus）と呼ばれる。2世紀末から3世紀初めのローマで小アジア出身の2人のテオドトス（θεόδοτος）、即ちビザンチンのテオドトス（「革なめし工テオドトス」とも呼ばれる）と両替商テオドトスが、キリストはただの人であったが、特に敬虔であったため、ヨルダン川での受洗の際に神が自らの霊（Πνεύμα）を与え、キリスト（霊）を受け入れたが、キリストの中に霊が顕現する以前は、神の諸力（δυνάμεις）はキリストの中で働いてはいなかった、と主張し、ローマ司教ウィクトル1世（Victor I, 在位189頃 - 198/9）によって革なめし工テオドトスは破門され、テ

2 Vgl. Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S.694.

3 Vgl. ebd.

4 Vgl. Brennecke, Hans Christof: Arius/Arianismus. Sp. 739. Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S. 695.

5 これらの説については、以下の文献も参照した。

Böhm, Thomas: Monarchianismus. In: RGG. 5, Sp. 1405 - 1408. Bienert, Wolfgang A.: Modalismus. In: RGG. 5, Sp. 1370f. Löhr, Winrich A.: Adoptianismus. In: RGG. 1, Sp. 123.

6 Vgl. Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S. 695. Bienert, Wolfgang A.: Modalismus. Sp.1370. Brennecke, Hans Christof: Arius/Arianismus. Sp. 739.

オドトス派は周辺に追いやられた。<sup>7</sup> また、アンティオキアの主教サモサタのパウロス (Παῦλος Ἀντιοχείας (Σαμοσατέας), 在位 260 頃 - 268)<sup>8</sup> は、人であるイエス・キリストの内部では、それ自体で存在する個の実体である位格 (ヒュポスタシス ὑπόστασις) を持たない力 (δύναμις) のみが有効であり、キリストは神の方へと向かう意志と善に於ける前進によって作用力を獲得したことで、同じ神に向かう絶えざる動きに基づいて神とつなぎ合わされている、と主張し、パウロスの基本的思想は、神の唯一性 (Monarchie) を基本とし、ソフィア (σοφία 智慧 = 聖霊) とロゴス (理性 = 子) は神の属性の一部であり、イエス・キリストは全くの人間であるが、特別に神のソフィアを分け与えられたというものである、とされている。<sup>9</sup> 換言すれば、パウロスはロゴスの位格的独立性 (hypostatische Selbständigkeit) を否定し、その代わりにロゴスを神の属性 (Eigenschaft) または力であると理解した。<sup>10</sup> パウロスは 264 年と 268 年の教会会議で自己の弁護を余儀なくされ、268 年の教会会議では異端とされ、罷免されたものの、その後も教会の建物を明け渡すことを拒み続け、270 年かその後間もなく、要請を受けた皇帝アウレリアヌス (Aurelianus, 215 頃 - 275、在位 270 - 275) によって追放された。<sup>11</sup>

もう一方の説は様態論 (Modalismus) と呼ばれ、教会会議で異端とされた

---

7 Vgl. Löhr, Winrich A.: Adoptianismus. Sp. 123. Böhm, Thomas: Monarchianismus. Sp. 1407. Ritter, a.a.O. Brennecke, a.a.O. 2 人のテオドトスについては、次の文献も参照した。

Böhm, Thomas: Theodot d.Ä. (»der Gerber«). In: RGG. 8, Sp. 247. Böhm, Thomas: Theodot d.J. (»der Wechsler«). In: RGG. 8, Sp. 247.

8 サモサタのパウロスに関しては以下の文献も参照した。

Slusser, Michael: Paulus von Samosata. In: TRE. 26, S. 160ff. Rist, Josef: Paul von Samosata. In: RGG. 6, Sp. 1030. エウセビオス『教会史』(下) (秦剛平 訳) 東京 2010 年 149 頁 - 159 頁。

9 Vgl. Ritter, a.a.O. S. a. Slusser, Michael: Paulus von Samosata. S. 161. Rist, a.a.O.

10 Vgl. Ritter, a.a.O. S. a. Slusser, a.a.O. Rist, a.a.O.

11 Vgl. Rist, a.a.O.. Slusser, Michael: Paulus von Samosata. S. 160. エウセビオス『教会史』(下) 158 頁。

スルッサーは、アタナシウス以来パウロスとその支持者らをパルミラの女王ゼノビアや反ローマ的な政治運動と結び付ける試みが為されてきたが、年代学と発掘された硬貨がその反証となっている、とする説を紹介している。Vgl. ebd.

いうスミルナのノエートス (Νοητός)<sup>12</sup>、2世紀末頃にローマで活動していたブラクセアス (Praxeas)<sup>13</sup>、215年頃からカリストゥス1世によって破門される迄ローマでノエートス派の指導者であったサベリウス (Sabellius, -260頃)<sup>14</sup>の名が知られている。この説も神の唯一性を重視しているが、イエス・キリストは神そのものであり、神の一樣態 (modus) であるとした。<sup>15</sup> サベリウスは、唯一の神は先ず、創造者かつ立法者としての父の様態 (πρόσωπον)、次いで救世主としての子の様態、最後に昇天後は聖霊の様態、という順序で排他的に様態を交替する、と主張したとされる。<sup>16</sup> 一樣態論は父 (神) 自らが受肉し、受難したとする「天父受難説 (Patripassianismus)」として非難された。<sup>17</sup>

これら異端説に対し正統的三位一体論は「1つの本質、3つの位格 (西方教会 *una substantia - tres personae*、東方教会 *μία οὐσία - τρεις ὑποστάσεις*)」<sup>18</sup> という表現で克服しようと努め、キリストを神の真の子であるとし、父 (神) の本質と神性を分かち持ち、神から直接造られた最初で最高の被造物であり、他の全ての被造物は神の意志によって子から造られた、としていた<sup>19</sup>。

### 3. アレイオス

4世紀になると、リビア出身でアレクサンドリアの都市教会、パウカリス教会 (ἡ Βαύκαλις) の司祭であり、アレクサンドリアで広く尊敬されていた禁欲主義者で

---

12 Vgl. Greschat, Katharina: Noët. In: RGG, 6, Sp. 352. Bienert, Wolfgang A.: Sabellius / Sabellianer. In: RGG, 7, Sp. 721.

13 Vgl. Bergjan, Silke-Petra: Praxeas. In: RGG, 6, Sp. 1576. Böhm, Thomas: Monarchianismus. Sp. 1406.

14 Vgl. Bienert, a.a.O. Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S. 695. Bienert, Wolfgang A.: Modalismus. Sp. 1370f.

15 Vgl. Ritter, a.a.O. Bienert, Wolfgang A.: Modalismus. Sp. 1370. Böhm, Thomas: Monarchianismus. Sp. 1405f. Brennecke, Hans Christof: Arius/Arianismus. Sp. 739.

16 Vgl. Ritter, S.695f.

17 Vgl. Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S.696.

18 Vgl. Bienert, Wolfgang A.: Modalismus. Sp.1371.

19 Vgl. Simonetti, Manlio: Arius, Arianismus, Arianer. Sp. 950.

説教者だったアレイオス (Ἀρειος Ἀλεξανδρείας, 256 頃 - 336) が三位一体論を否定する説を展開した。<sup>20</sup> この論争は 318 年にアレクサンドリアの教会内で始まったと考えられている<sup>21</sup> が、中期プラトン主義の否定神学からの影響が見られるアレイオス<sup>22</sup> の、正統的三位一体論に対する主張は以下のようなものであった<sup>23</sup>。

神の 3 つの位格は確かに存在するが、神自身であるのは父のみであり、神自身でない位格は皆、神によって創造されたもの、神の意志によって無から造られた<sup>24</sup>。全てのものが神の実体から流出すること (emanatio)、神の実体の分割や複製などということは、神の全くの単一性、非物質性、不変性の否定であり、決してあり得ない。子は生まれた者であり、神自身は本質的に「始まりがない」のに対し、子は「始まり」を持つが故に明らかに被造物の領域に入る。子は従って、神以外の全てのものと同様に、父の意志の純粋な行為によって無から生まれたのだから、「彼が存在しなかった時があった (ἦν ποτέ ὅτε οὐκ ἦν)」のである。子は本来の意味ではなく (καταχρηστικῶς) ログスでありソフィアである。と言うのも真のログス、真のソフィアは神に内在しており、神の固有の分かつことの出来ない本質に属するからだ。故に子は、たとえ実際に善を行うことを決断し、自分の意志を神の意志に一致させ続けてはいても、生まれつき、我々と同じく、変わり易く (τρεπτός)、自由意志を持っている (αὐτεξούσιον) のだから、父と「同本質 (ὁμοούσιος ホモウーシオス)」ではなく、「父の本質と特性に関する全

---

20 Vgl. Brennecke, a.a.O. Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S.698f. Simonetti, Manlio: Arius, Arianismus, Arianer. Sp. 949.

21 Vgl. Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S.699.

22 Vgl. Brennecke, a.a.O. Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S.701.

23 以下のアレイオスの主張に就いては、主にリッターに拠り、適宜シモネッティ、ブレネック等で補足する。文中のギリシア語はリッターのテキストから引いたものであるが、その和訳はギリシア語の表現を尊重し、リッターのドイツ語訳とは表現がごく一部ではあるが異なっている。Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S.700ff. Simonetti, Manlio: Arius, Arianismus, Arianer. Sp. 950f. Brennecke, Hans Christof: Arius/Arianismus. Sp. 739f.

24 子 (キリスト) が無から造られたとする説に関しては、アレイオス自身とその支持者らは後に和らげたが、父の本質から生まれたとする正統派の説は決して認めなかった。Vgl. Simonetti, Manlio: Arius, Arianismus, Arianer. Sp. 950.

てに於いて異質で、似ていない (ἀλλότριος μὲν καὶ ἀνόμιος κατὰ πάντα τῆς τοῦ πατρὸς οὐδίας καὶ ἰδιότητος)。」しかし、子のこの道徳的自己決定に基づく不変性 (ἀναλλοίωτον) を神が予見したが故に、子が後に人として自らの善 (ἀρετή) によって獲得することになる栄光 (δόξα) を予め付与したのである。そもそも子が存在するに至ったことは、神の創造の意志に負っている。そして彼を通じて神は創造の業を行っているのである。そして子が創造の仲介者であると同様に救世主でもある。彼は受肉し、即ち、1つの「魂のない肉体」に入り、それによって、彼、ロゴス自らが、福音書で報告されている地上のイエスの展開の主体となる。同様にまた、苦しむ者、涙する者、飢える者、恐れためらう者の全ての激情は人間の魂ではなく、彼、ロゴスに帰すべきである。それによって彼は正に、彼が如何に崇高であろうとも、「表現不可能な」唯一の父の栄光 (δόξα) には遠く及ばないということを証明している。

如上の主張をしたアレイオスは、子は父なる神と同じ永遠性を持ち、神の完全なる似姿であるとする<sup>25</sup> アレクサンドリアの主教アレクサンドロス (Ἀλέξανδρος Ἀλεξανδρείας, 250 - 328) と対立し、アレクサンドリアの教会会議で彼の同調者らと共に<sup>26</sup> 破門され、その後パレスティナへ逃れ、そこでカイサリアの主教エウセビオス (Εὐσέβιος Καισαρείας, 260 頃 - 340 頃)<sup>27</sup> やニコメディアの主教エウセビオス (Εὐσέβιος Νικομηδείας, - 341)<sup>28</sup> を始め多くの支援者を得て、ビトゥニアとパレスティナで開かれた教会会議でアレイオスの正当性が認められ、ニコメディアの司教エウセビオスによって<sup>29</sup> 復権した。また、アレイオスにも教示したカッパドキア出身のソフィスト、アステリオス (Ἀστέριος, 260

25 Vgl. Brennecke, Hans Christof: Arius/Arianismus. Sp. 740.

26 Vgl. ebd.

27 カイサリアの主教エウセビオスに関しては以下の文献も参照した。

Wallace-Hadrill, David S.: Eusebius von Caesarea. In: TRE. 10, S.537 - 543. Ulrich, Jörg: Eusebius von Caesarea. In: RGG. 2, Sp. 1676f. Frank, Karl Suso: Eusebios, 4. E. v. Kaiscreia. In: LM. 4, Sp. 106f.

28 ニコメディアの主教エウセビオスに就いては以下の文献も参照した。

Vinzent, Markus: Eusebius von Nikomedien. In: RGG. 2, Sp. 1678. Cramer, Winfrid: Eusebios, 5. E. v. Nikomedeia. In LM. 4, Sp. 107f.

29 Vgl. Brennecke, a.a.O.

マクデブルクのメヒティルト著『神性の流れる光』の社会的背景 5－教皇の首位権 (2) (狩野智洋)

～280 - 341 以後) はアレイオス主義を真に体系づけた。<sup>30</sup> その一方で、後にアンティオキアの主教となるシリアのペロエア (現在のアレppo) の主教エウスタティオス (Ευστάθιος Αντιοχείας, 280 頃 - 337 以前、又は 360/61) やアンキュラの主教マルケロス (Μάρκελλος Ἀγκυρας, 280 頃 - 374) は、子 (キリスト) が父 (神) より劣り、父に従属するという従属説に反対し、父と子は同一本質であるとの立場から、アレイオスらを強く批判した。<sup>31</sup>

## 4. アレイオス派と反アレイオス派の対立

### 4.1. ニカイア公会議

帝国の平和を保つために教会の一致は不可欠であると考えていた<sup>32</sup> コンスタンティヌス 1 世が単独支配を確立した時には、上記の様に東方教会では神学上の問題から 2 つの陣営に分裂していたため皇帝が仲裁に乗り出すこととなった。当初彼は事の重大さを見誤り、双方の二人の首謀者、アレクサンドリアの主教アレクサンドロスと、当時既にアレクサンドリアに戻っていたと思われる<sup>33</sup> アレイオスに宛て、争い故に両者を非難する 1 通の手紙を皇帝の教会関係顧問コルドバ司教ホシウス (Hosius (Ossius) Cordubensis, 257 頃 - 357

---

30 Vgl. Brennecke, a.a.O. Vinzent, Markus: Asterius. In: RGG. 1, 850f.

アステリオスに就いては上記の他に次の文献も参照した。

Kraft, Heinrich: Asterius, 2. A. (Asterios), Schüler des Märtyrers Lucianus. In: LM. 1, Sp. 1128.

31 Vgl. Brennecke, a.a.O.

エウスタティオスとマルケロスに関しては以下の文献も参照した。

Lorenz, Rudolf: Eustathius von Antiochien. In: TRE. 10, S. 543 - 546. Seibt, Klaus: Eustathius von Antiochien. In: RGG. 2, Sp. 1680f. Hauschild, Wolf-Dieter: Eusthatios(!), 1. E., Bf. v. Antiochia. In: LM. 4, Sp. 112. Seibt, Klaus: Marcell von Ancyra. In: TRE. 22, S. 83 - 89. Feige, Gerhard: Markell von Ancyra. In: RGG. 5, Sp. 833. Konstantinou, Evangelos: Markellos. In: LM. 6, Sp.304.

32 Vgl. Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S.703. Brennecke, a.a.O. 狩野智洋「マクデブルクのメヒティルト著『神性の流れる光』の社会的背景 4」『言語 文化 社会』第 18 号 (学習院大学外国語教育研究センター) 2020 年 1 頁 - 18 頁。該当箇所は 10 頁 - 11 頁。

33 Vgl. Ritter, a.a.O.

頃)<sup>34</sup>に託したが不首尾に終わった。<sup>35</sup> ホシウスは325年、皇帝の居城があるニコメディアへの帰途、アンティオキアに滞在した折り、ここでも、特に主教の空位により様々な党派が自らに有利に事を進めようとして、アレクサンドリアと同様の混乱した状況にあることを目の当たりにし、パレスティナやアラビア、フェニキア、コイレ・シリア及びカッパドキアから50人以上の主教を集め、自らが主催して教会会議を開催し、積極的にアレイオス派に反対するペロエアの主教エウスタティオスをアンティオキアの新主教に選定すると同時に、いわばこの機会を利用し、アレクサンドリア主教アレクサンドロスがテッサロニキのアレクサンドロスの支持を得るために自らの立場を説明した手紙に極めて近い内容を持つ、反アレイオスの立場を明確にする詳細で正式な説明を公表し、アレイオスを異端であるとし、また、最終的にアレイオスとその支持者らの異端宣告を含む信条に署名することを拒否したカイサリア主教エウセビオスを含む3人の主教を破門した。<sup>36</sup> しかし彼ら3人には来たるべき公会議で自分達の信仰の正しさを証明する機会があることが明示された。<sup>37</sup> 三位一体の考え方が広く伝わっていた西方の司教ホシウスは遅くともアンティオキアでは、皇帝の手紙の意図に反し、アレイオスの異端を確信していたものと思われる。<sup>38</sup>

公会議は当初アンキュラ（現在のアンカラ）で開催される予定であったが、諸般の事情を勘案して、皇帝の居城があるニコメディアに近いビトゥニア（現在のイズニク）のニカイアに変更され、そこの皇帝宮殿の1つで行われることとなった。<sup>39</sup>

---

34 ホシウスについては以下の文献も参照した。

Ritter, Adolf Martin: Osius von Cordoba. In: RGG. 6, Sp.725. Alonso-Núñez, José Miguel: Hosius (Ossius) v. Cordoba. In: LM. 5, Sp. 132f.

35 Vgl. Ritter, Adolf Martin: Arianismus. A.a.O. Brennecke, a.a.O..

36 Vgl. Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S.703f. Brennecke, a.a.O.

37 Vgl. Brennecke, Hans Christof: Nicäa I. In: TRE. 24, S. 429 - 441, hier S. 430. Drecoll, Volker Henning: Nicaea (Nizäa/Nikaia), Konzil von 325. In: RGG. 6, Sp. 277 - 280, hier Sp. 278.

38 Vgl. Brennecke, Hans Christof: Nicäa I. S. 430.

39 Vgl. Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S.704. Brennecke, Hans Christof: Nicäa I. S. 431. Drecoll, Volker Henning: Nicaea (Nizäa/Nikaia), Konzil von 325. Sp. 278.



リキニウス (- 325, 在位 308 - 324) による弾圧からキリスト教を解放する戦いに勝利して単独皇帝となったコンスタンティヌス 1 世が、「神によって召命された統治者として、神によって (キリスト教の) 信仰を広めるための配慮を委ねられた神の僕として (als von Gott berufener Herrscher, als Diener Gottes, dem von Gott die Sorge für die Ausbreitung des (christlichen) Glaubens anvertraut ist)」<sup>40</sup>、「再び得られた帝国の統一を今度は宗教的にも確実なものとする統一された教会会議 (eine die wiedergewonnene Einheit des Reiches nun auch kirchlich besiegelnde Einheitssynode)」<sup>41</sup>の議長を、ホシウスの補助で、自ら務めた<sup>42</sup>。皇帝にとっては帝国の平和を維持することが重要であり、アレイオス派と反アレイオス派の何れか一方を支援することは避け、対立解消のための処分も必要最小限に抑えた。<sup>43</sup>

ところで、カイサリアの主教エウセビオスが信仰告白を行ったが、これに皇帝が、父からロゴスが生まれる事に関して身体的流出のイメージが生じることを避けるために、「同本質 (ὁμοούσιος ホモウーシオス)」の 1 語を加えるよう要求した。<sup>44</sup>しかし、この語はロゴス (子) が全く神的存在であるという事を示すためのものであり<sup>45</sup>、何れかの党派とも決して同一視されてはならないと考える皇帝

---

40 Brennecke, Hans Christof: Nicäa I. S. 429.

41 Brennecke, Hans Christof: Nicäa I. S. 430.

42 Vgl. Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S.705. Brennecke, Hans Christof: Nicäa I. S. 432. Drecoll, Volker Henning: Nicaea (Nizäa/Nikaia), Konzil von 325. Sp. 278.

43 Vgl. Ritter, a.a.O.

リッターは、公会議の開催地が、積極的な反アレイオスの立場を取るマルケロスが司教の座にあったアンキュラから、アレイオスを支持するニコメディアのエウセビオスの教会管区内のニカイアに変更されたのは、自らの判決を先例としようとしたアンティオキアの教会会議構成員達の試みに対する皇帝の対応であった可能性を指摘している。Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S.704.

44 Vgl. Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S.705. Brennecke, Hans Christof: Nicäa I. S. 433. Drecoll, Volker Henning: Nicaea (Nizäa/Nikaia), Konzil von 325. Sp. 278.

この „ὁμοούσιος“ の挿入に関して従来は西方教会、即ち、コルドバ司教ホシウスの影響によるものであるとされていたが、現在この定説は疑問視されている。リッターは従来定説が依然として有効であるとしているが、ドレコルは否定的立場を取っている。Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S.706. Drecoll, Volker Henning: Nicaenisches Symbol. In: RGG. 6, Sp. 280ff., hier Sp. 281.

45 Vgl. Brennecke, Hans Christof: Nicäa I. S. 434.

の意図に沿った妥協的性格を有し、意味内容の曖昧さにより、様々な解釈の可能性を含んでいた<sup>46</sup>。

これに対し、議論に於いて優勢であったアレクサンドロス、エウスタティオス、マルケロス、ホシウスを中心とした反アレイオス派が信条の最終的な編集を任され、反アレイオスの要点部分に手を加え、„ὁμοούσιος“に補足的説明を添えた。イエス・キリストが父から生まれた一人子であるという個所では、「即ち父の本質から (τούτέστιν ἐκ τῆς οὐσίας τοῦ πατρὸς)」と補足し、「真の神から生まれた真の神 (θεὸν ἀληθινόν ἐκ θεοῦ Ἀληθινοῦ)」、*「生まれたものであり、造られた者ではない (γεννηθέντα οὐ ποιηθέντα)」、*「父と同本質 (ὁμοούσιον ᾧ πατρὶ)」である、と強調している。<sup>47</sup>最後にアレイオス派に対する、儀式に則って行われる破門 (Anathema) の為の文章が続き、彼らの主張の問題となる5点が上げられ、彼らを破門することが述べられる。<sup>48</sup>信条への署名を拒んだアレイオス、プトレマイスの主教セクンドス (Σεκούνδος)、マルマリカの主教テオーナス (Τεωναῖς) の3人が破門され<sup>49</sup>、ニカイアのテオグニス (Τέογνις) とニコメディアのエウセビオスはアレイオスの支援を続けたため後に追放された<sup>50</sup>。

## 4.2. ニカイア公会議後

ニカイア公会議後の主導権を握ったのがエウセビオス達であった。皇帝が既に327年末頃に、ニカイア公会議に於いて明確に非とされた全ての言い回しを

---

46 Vgl. Ritter, a.a.O. Brennecke, a.a.O.

47 Vgl. Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S.705. Brennecke, Hans Christof: Nicäa I. S. 433. Drecoll, Volker Henning: Nicaenisches Symbol. Sp. 281.

ギリシア語の引用はリッターに拠った。

48 Vgl. Brennecke, a.a.O. Drecoll, a.a.O.

49 Vgl. Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S.706. Brennecke, Hans Christof: Nicäa I. S. 434. Drecoll, Volker Henning: Nicaea (Nizäa/Nikaia), Konzil von 325. Sp. 278.

50 Vgl. Vinzent, Markus: Eusebius von Nikomedien. Sp. 1678. Ritter, a.a.O. Cramer, Winfrid: Eusebios, 5. E. v. Nikomedeia. Sp. 107. Brennecke, Hans Christof: Arius/Arianismus. Sp. 741. Drecoll, a.a.O.

ニコメディアのエウセビオスのガリアへの追放については、リキニウスと親しかったために嫌疑を掛けられた可能性も指摘されている。Vinzent, a.a.O. Ritter, a.a.O. Brennecke, a.a.O.

避けた書面による信仰告白と口頭による説明で、アレイオスに対して下された追放処分を取り消し、その完全な復権とアレクサンドリアへの帰還を認めた。<sup>51</sup> その後の328年又は329年に、ニコメディアのエウセビオスはカッパドキアのアステリオスによる彼のための弁明書と自らの丁重な手紙によって皇帝から復権を許され、間もなく皇帝の教会関係顧問となった<sup>52</sup>。教会の平和を帝国の平和の基盤にしようとする皇帝にとって、ニカイア公会議で断罪され、その後復権を許された者達を教会の一員として融和させることは当然のことであり、それに反対する者達は教会の一致と平和、ひいては帝国の一致と平和を乱すことになる。反アレイオス派の人々はこれに触れることとなる。

アンティオキアの主教エウスタティオスはアレイオス主義に対し妥協のない厳しい姿勢で臨み、アレイオス主義的思考を持つ者達を聖職団に加えることを頑なに拒み、また、カイサリアの主教エウセビオスをニカイア信条を歪曲したとして攻撃した。<sup>53</sup> しかし、ペロエアの彼の後任主教キュロス (Κύρος) によってサベリウス主義の罪を着せられ、カイサリアのエウセビオス議長の下で、恐らく328年又は329年に罷免され、その後、アンティオキアでこれが原因で騒乱が起き、皇帝による尋問を受けた後、多くの配下の聖職者達と共に、恐らくトラキアのトラヤノポリスに追放された。<sup>54</sup> その後彼の支持者達が別個の教区を形成し、アンティオキアの教会は最終的に413年まで分裂することとなった。<sup>55</sup>

336年アンキュラの主教マルケロスはカッパドキアのソフィスト、アステリ

---

51 Vgl. Ritter, a.a.O.

52 Vgl. Vinzent, Markus: Eusebius von Nikomedien. Sp. 1678. Cramer, Winfrid: Eusebios, 5. E. v. Nikomedeia. Sp. 107. Vinzent, Markus: Asterius. 850.

ホシウスは326年に皇帝の教会関係顧問を解任されていた。Vgl. Lorenz, Rudolf: Eustathius von Antiochien. S. 544.

53 Vgl. Lorenz, a.a.O.

54 Vgl. ebd.

ローレンツは、ニコメディアのエウセビオスが金で雇った女に偽証させ、エウスタティオスを罷免させたという計略説は、聖徒伝の作り話とみるべきだと主張している。Vgl. Ebd. S. a., Seibt, Klaus: Eustathius von Antiochien. Sp. 1680. Hauschild, Wolf-Dieter: Eustathios(!), 1. E., Bf. v. Antiochia. Sp. 112.

55 Vgl. Hauschild, Wolf-Dieter: Eustathios(!), 1. E., Bf. v. Antiochia. Sp. 1125. Lorenz, a.a.O.

オスを異端として激しく論難すると共に、特に2人のエウセビオスの従属説を厳しく批判した著作をコンスタンティヌス1世に自ら手渡したが、皇帝はコンスタンティノポリスで教会会議を招集してこの書物の判断を委ね、教会会議でマルケロスがサベリウス主義者であるとされ、キリストの王としての支配に始まりと終わりがあるとする主張の故に破門、罷免され、追放された。<sup>56</sup>これに関してカイサリアのエウセビオスがマルケロスに対する2本の反論書を書いた。<sup>57</sup>

アレクサンドリアのアレクサンドロスが死去した後、328年に手続き上瑕疵のある過程を経て後継主教となったアタナシオス (Αθανάσιος Αλεξανδρείας, 在位 328 - 373) は、コンスタンティヌス1世の強い要請にも拘わらず、復権したアレイオスのアレクサンドリア教会への受け入れを拒み続けた。<sup>58</sup>恐らく333年に、アレイオスとその同調者らの著作を焚書して記憶から消し去るべし、と言う勅令を出したアタナシオスは、既に2人のエウセビオスに代表される東方教会の多数派であった神学と同調していた皇帝の統一政策にとっての妨害者となっていた。アタナシオスに対する批判が高まり、恐らくニコメディアのエウセビオスの強い要請により皇帝が334年カイサリアで教会会議を招集したが、アタナシオスは出席を拒んだ。これによりエウセビオス派は正当性を得ると同時に、憤慨した皇帝が最終的に彼に対し厳しい態度を取ることとなった。その結果334年テルスで彼に対して行われ、またもエウセビオス派によって主導された教会会議が開催され、この時も彼は欠席したが、彼の罷免が決定され、その2ヶ月後皇帝によって追放された。一方、同じ教会会議参加者らによってエルサレムで会議が行われ、アレイオスの教会復帰が宣告されたが、コンスタンティノポリスでこの決定が厳粛に実行される直前にアレイオスは死んだ。

---

56 Vgl. Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S.707. Seibt, Klaus: Marcell von Ancyra. S. 83f. Feige, Gerhard: Markell von Ancyra. Sp. 833. Konstantinou, Evangelos: Markellos. Sp.304.

57 Vgl. Seibt, Klaus: Marcell von Ancyra. S. 84.

58 アタナシオスの失脚とアレイオスの復帰に就いては主にリッターに拠り、適宜以下に挙げる文献で補完した。Ritter, Adolf Martin: Arianismus. S.707f. Tetz, Martin: Athanasius von Alexandrien. In: TRE. 4, S. 333 - 349. Williams, Rowan: Athanasius. In: RGG. 1, Sp. 870 - 873. Katsanakis, Anastasios: Athanasios, I. A. d. Gr., hl. In: LM. 1, Sp. 1160f.

コンスタンティヌス 1 世は 337 年死の床で受洗するが、洗礼を施したのはニコメディアのエウセビオスであった。<sup>59</sup>

## 5. 結語

コンスタンティヌス 1 世の登場により、迫害から優遇へとキリスト教（会）の環境は大きく転換したが、その一方で、皇帝の教会に対する介入を招くことにもなった。神（父）とキリスト（子）の関係を巡る論争は当初純粋な神学論争であったが、教会が帝国の平和政策に組み込まれ、神学よりも教会の一致を優先する皇帝が教会の事項に介入する事態となったため、皇帝に対する影響力の強弱により立場が逆転する権力闘争の性質を帯びるようになった。後の 11 世紀の叙任権闘争の根本的原因は、正に皇帝（世俗権力）による教会への介入が始まった 4 世紀にあると言っても過言ではない。皇帝を巻き込んだアレイオス派（エウセビオス派）と反アレイオス派（ニカイア信条派）の対立は更に激しさを増し、東方教会の枠を越えて西方教会、ローマ司教にも影響を及ぼすことになる。この点に関しては次稿で論じたいと思う。

---

59 Vgl. Vinzent, Markus: Eusebius von Nikomedien. Sp. 1678.

\*本研究は JSPS 科研費 23520393 の助成を受けたものである。

## 文献表

### 一次文献

Mechthild von Magdeburg: Das fließende Licht der Gottheit. Nach der Einsiedler Handschrift in kritischem Vergleich mit der gesamten Überlieferung. Hrsg. von Hans Neumann. München / Zürich, 1990.

Mechthild von Magdeburg: Das fließende Licht der Gottheit. Hrsg. von Gisela Vollmann-Profe. Frankfurt/M, 2003.

Mechthild von Magdeburg: Das fließende Licht der Gottheit. Zweite, neubearbeitete Übersetzung mit Einführung und Kommentar von Margot Schmidt. Stuttgart-Bad Cannstatt, 1995.

マクデブルクのメヒティルト (上田兼義 訳): 神性の流れる光 キリスト教神秘主義著作集 第4巻I 東京 1996。

マクデブルクのメヒティルト (香田芳樹 訳): 神性の流れる光 ドイツ神秘主義叢書1 東京 1999年。

共同訳聖書実行委員会: 聖書 新共同訳—旧約聖書統編つき 東京 1987/1988。

Nestle, Eberhard / Nestle, Erwin / Aland, Barbara / Aland, Kurt (Hrsg.): Novum Testamentum Graece et Latine. Textum Graecum post Eberhard et Erwin Nestle communiter ediderunt Barbara et Kurt Aland, Johannes Karavidopoulos, Carlo M. Martini, Bruce M. Metzger. Textus Latinus Novae Vulgatae Bibliorum Sacrorum Editioni debetur. Utriusque textus apparatus criticum recensuerunt et editionem novis curis elaboraverunt Barbara et Kurt Aland una cum Instituto Studiorum Textus Novi Testamenti Monasterii Westphaliae. 3. neu bearbeitete Aufl., 5. Druck. Deutsche Bibelgesellschaft, 2005.

## 二次文献

- Krause, Gerhard / Müller, Gerhard (Hrsg.): Theologische Realenzyklopädie. Studienausgabe. 1-36. Berlin, New York, 1993-2006.
- Betz, Hans Dieter / Browning, Don S. / Janowski, Bernd / Jüngel, Eberhard (Hrsg.): Religion in Geschichte und Gegenwart. Handbuch für Theologie und Religionswissenschaft. Vierte, völlig neu bearbeitete Auflage. Ungekürzte Studienausgabe. Tübingen, 2008.
- Avella-Wildhalm, Gloria / Lutz, Liselotte / Mattejiet, Roswitha / Mattejiet, Ulrich (Hrsg.): Lexikon des Mittelalters. Studienausgabe. 1-9. Stuttgart, Weimar, 1999.
- 大貫隆 / 名取四郎 / 宮本久雄 / 百瀬文晃 編：キリスト教辞典 東京 2002。
- 川口洋：キリスト教用語独和小辞典 東京 1996。
- 今橋朗 / 竹内謙太郎 / 越川弘英 監修：キリスト教礼拝・礼拝学事典 東京 2006。
- Ruh, Kurt: Geschichte der abendländischen Mystik. 1(2., Aufl.)-4. München, 1993-1999(Bd.2-3), 2001(Bd.1.).
- McGinn, Bernard: The presence of God: a history of Western Christian mysticism. 1-3. New York, 1991-1998.
- Langer, Otto: Christliche Mystik im Mittelalter. Darmstadt, 2004.
- Grundmann, Herbert: Religiöse Bewegungen im Mittelalter. 4., unveränderte Auflage. Reprografischer Nachdruck der 1. Auflage, Berlin 1935 (=Historische Studien, Heft 267) Mit einem Vorwort zum Neudruck 1960 und dem vom Verfasser auf dem Zehnten Internationalen Kongreß der Geschichtswissenschaften, Rom 1955, erstatteten und ergänzten Forschungsbericht „Neue Beiträge zur Geschichte der religiösen Bewegungen im Mittelalter“. Darmstadt, 1977.
- Grundmann, Herbert: Ketzergeschichte des Mittelalters. 3., durchgesehene Aufl. In: Die Kirche in ihrer Geschichte. Ein Handbuch herausgegeben von Kurt Dietrich Schmidt und Ernst Wolf Band 2, Lieferung G (1. Teil) Göttingen, 1978.

- Balthasar, Hans Urs von (Hrsg.): Die großen Ordensregeln. 8. Aufl. Einsiedeln, 2010.
- Laudage, Johannes / Schrör, Matthias (Hrsg.): Der Investiturstreit. Quellen und Materialien (Lateinisch - Deutsch). 2. völlig überarbeitete und stark erweiterte Aufl. Köln, 2006.
- Goez, Werner: Kirchenreform und Investiturstreit 910-1122. 2., aktualisierte Auflage. Bearbeitet von Elke Goez. Stuttgart, 2008.
- Schieffer, Rudolf: Papst Gregor □. Kirbenreform und Investiturstreit. München, 2010.
- Goez, Elke: Papsttum und Kaisertum im Mittelalter. Darmstadt, 2009.
- Zey, Claudia: Der Investiturstreit. München, 2017.
- Gleba, Gudrun: Klosterleben im Mittelalter. Darmstadt, 2004.
- Morris, Colin: The Papal Monarchy. The western church from 1050 to 1250. Oxford, 1989, reprinted 2001.
- Buttinger, Sabine: Hinter Klostermauern. Darmstadt, 2007.
- Lambert, Malcolm: Medieval Heresy : popular movements from the Gregorian reform to the Reformation. 3rd ed. Malden, Oxford, Carlton, 2002.
- Kee, Howard Clark : Was wissen wir Jesus? Übersetzt von Ulrike Jung-Grell. Durchgesehene Ausg. Stuttgart, 1999.
- Padberg, Lutz E. von: Die Christianisierung Europas im Mittelalter. - Stuttgart, 1998.
- Reichstein, Frank-Michael: Das Beginenwesen in Deutschland : Studien und Katalog. Berlin, 2001.
- Simons, Walter: Cities of ladies: Beguine communities in the medieval low countries, 1200-1565. Philadelphia, 2001.
- Föbel, Amalie / Hettinger, Anette: Klosterfrauen, Beginen, Ketznerinnen. Religiöse Lebensformen von Frauen im Mittelalter. Idstein, 2000.
- Ennen, Edith: Frauen im Mittelalter. 6. Aufl. München, 1999.
- Borst, Arno: Lebensformen im Mittelalter. Neuausgabe. 5. Aufl. Berlin, 2010.



マクデブルクのメヒティルト著『神性の流れる光』の社会的背景 5－教皇の首位権 (2) (狩野智洋)

Goetz, Hans-Werner: Leben im Mittelalter vom 7. bis zum 13. Jahrhundert. 7. Aufl. München, 2002.

Engel, Evamaria: Die deutsche Stadt im Mittelalter. Düsseldorf, 2005.

Schubert, Ernst: Alltag im Mittelalter. Natürliches Lebensumfeld und menschliches Miteinander. Darmstadt, 2002.

荒井献 編『使徒教父文書』東京 1998 年。

エウセビオス『教会史』(上下) (秦剛平 訳) 東京 2010 年。

The social contexts of *The Flowing Light of the  
Godhead* by Mechthild of Magdeburg (5)  
– Papal Primacy (2) –

Karino, Toshihiro

On the one hand, Constantine I, the emperor of the Roman Empire, gave Christianity and the Church a beneficial change from being persecuted to being favoured. But on the other hand, because of the intervention in the Church by the emperor, who intended to establish the peace of the empire on the basis of orthodoxy within the Church, purely theological debates among clergymen about the relationship between God (the Father) and Christ (the Son) became struggles over the power that was obtained by standing in high favour of the emperor. Clergyman whom the emperor considered obstructors of orthodoxy within the Church were forced into exile. It is not too much to say that the Investiture Controversy in the 11th century has its root exactly in the beginning of the intervention in the Church by the emperor in the 4th century.